國家の工事に一生を捧げた

淺野總一郎翁

淺野總一郎氏は嘉永元年三月、富山縣氷見郡鍛冶村の醫家に生れ、十六歳の頃より實業に志し、二十一歳の時に積極行動に破綻を生じ、二十四歳の明治四年鄉里を出奔して上京し其夏、御茶の水の路傍に冷水を賣つたのが帝都事業の第一歩であつた。

翌年横濱にて竹の皮の行商を初め、其時飯炊の上手な女と云ふ條件で娶つたのが、淺野氏糟糠の妻たる賢夫人サタ女であつた。

次いで薪炭商から石炭商となり、三十歳の明治十年に西南戰爭のため石炭暴騰して初めて巨利を博した。

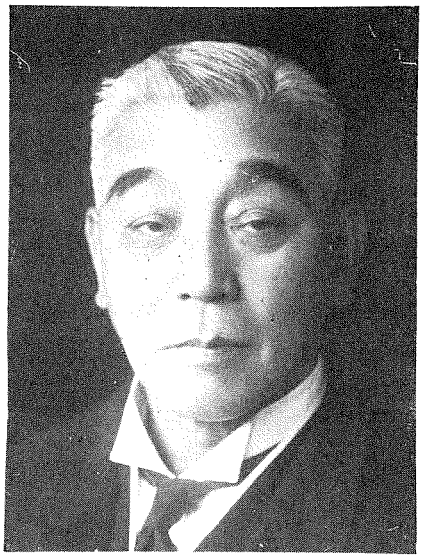
明治十四年工部省より深川のセメント工場の貸下を受け次いで、炭鑛運輸事業を初め澁澤榮一、大倉喜八郎諸氏と上野平間の鐵道敷設を企た。

明治二十五年米人技師ワーデル氏に宇治川の水力利用の調査を依頼した。二十九年東洋汽船會社を創立し、三十一年財王安田善次郎氏と財的に握手して以來、淺野氏の事業は益々擴張し、明治四十年には東京灣築港計劃及び、鶴見海岸百五十萬坪の埋立計劃を立てた。

明治四十二年外賓接待の爲めに其の自邸に紫雲閣を建立し、大正八年頃までは實に歐洲大戰の影響をうけて、日本の事業界に完全に淺野王國を建設した。其年八年には庄川水力電氣會社、關東水力電氣會社等を創立した。

昭和九年には淺野綜合中學校を生麥の丘上に設立した。其他新事業會社の創立も多數であるが、特にセメント會社の大擴張、鶴見埋立事業の完成と此が利用の方法等は最も注目すべきものである。

昭和五年十一月九日八十三歳を以て沒するまで、淺野氏の一生は、滿々と溢れる樣な事業的元氣に燃えてゐた。



故淺野總一郎翁

大隈重信侯は『平々坦々たる無臭罐と異り、山なれば妙義榛名の如く、奇岩怪石に富み』と言ひ、

高橋是清子は『迷路は足を失ひて禪道を大悟し、淺野君はお錢を貯めずに幾十の事業を大成し‥‥俱に透徹した悟道の共鳴者であらう』と言ひ。

日本の蓄財王安田善次郎氏は『私は苟もあれだけの仕事をする男を援助して、假に目的が遂げられず、資金が丸潰れとなつても私は左程遺憾とは存じません云々』と後藤新平伯に語つてゐる。

然し淺野翁は決して名士の讃辭を頂みる人ではなかつた、一年たつた一日の正月元旦の休日を無爲に過すを苦痛と感ずる位働きぬいた人である。

淺野翁の信條は『稼ぐに追付く貧乏なし』と云ふ簡單極まるものであつた。此言を淺野翁の如く人生の一大活動に能く俱現した人は東西古今未だ無い處である。八十三年の人生も永いが、事業の上から見ると數百千年の永い人生に匹敵するものである。